
心に響いて

色とりどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心に響いて

【Nコード】
N6493P

【作者名】
色とりどり

【あらすじ】
音を味として感じる音葉の恋愛ストーリーです。

俺の名前は石井 音葉【Isii Otohara】 高校生一年生両親と3人暮らし一軒家どっからどう見てもふつうだと思っしかしそのふつうとは、少し違った

俺には不思議な力が生まれつき持っていた。それは音を味として感じる力であつたしかしその音はしつかり聞こえている。その力のせいでその人の感情まで少しなら読み取れる。

僕はその力のせいか元々なのは分らないが聴力がとてもよかった。

今日は夏休みのあけた少し涼しくなっていていく秋の半ばひと月前まで鮮やかな緑色

だったのに今や真っ赤に染まって散っていたそんな外の景色を見ながら伊集院先生の呪文のような数学の説明はいつもは辛く感じる塩っけなのに今日は限りなく無味に近い塩っけだった俺はきつと何かあつたのだろうと思つた。授業が終わり次第先生に聞いてみた

「先生今日元気ないですよ！なにかあつたんですか？」先生は少し動揺したかに見えた

「お前みたいに授業無視するやつがいるからだろ」そう顔は笑いながら口調は怒りながらそう言つたその口調からは不思議と甘みがあった。伊集院先生のことを他の先生に聞いてみたら今日伊集院先生のお母さんが亡くなつたらしい。「なにかあつたんですか？」このセリフは先生はどんな気持で聞いたのだろうとすぐく申し訳なくなつた。お昼休みに伊集院先生は教室に顔を出した「少しいいか？」そう言つて俺を呼ぶさっきのことがあつて少し暗い返事をした「はい・・」先生は少しほえんで「石井さっきは声掛けてくれてありがとうな」俺は意外な言葉にとて驚いた「い、いえただ気になつたので」それに「そうか」

と答えたそして先生は職員室のある方へ歩いて行つた俺はこの複雑

な気持ちを落ち着かせるためにいつもの休憩場所の音楽室に行った
音楽室は3階の4つ角すべてにある。

俺にとっては教室は雑音ばかりとても味わえたものではない。

味はすると言ってもお腹が膨れるわけではない。正門からみて右下
の音楽室で一人でお昼を食べるのはもうすでに日課になっていた。

ゆっくりと味わって食う。家には駄目な父親しかいないだからいつ
も俺が飯を作っている。最近また腕を上げた、自分でそう思う。す
るととても美味な味がした。この弁当では、なかったでは何の味な
のだろう？そう思った耳をすませるとうつすらとバイオリンの音が
聞こえたとても清らかでかつ豪快なメロディーは今までで一度も味
わったことのないものだったあわてて音楽室を出ると左下の方
から聞こえていた音楽室ほとんど音を通さなかったためこんなにま
で小さかったのかと納得した。とびらのガラスから中をのぞくする
とバイオリンを弾いている髪の長い女の子がいた俺はこの音に聞き
惚れてしまった。ゆっくり扉をあけるそのかすかな音に気付いたの
か女の子は弾くのをやめたそしてゆっくりと顔をあげた。

音に出ていたような清楚さがあつた目はそれほど大きくは、なかっ
た。かけていたメガネは少しずれていた。髪の長さは腰のあたり結
ばないであつた。身長は程大くない標準と言っただった。この
人はクラスの男子が入学してから少したって噂になっていた

美月 千恵【Miduki Tie】地毛の茶髪は美しく滑らかで
きれいだった頭脳明晰容姿端麗

とは、まさに彼女のためにあるのではないかとおもえるほどすごか
った。

同じ学年の隣のクラス時々見かけたけど話しかけようと思ったこ
とはなかった。あんまり人と接するのが苦手だったから。自分のバ
イオリンを聞かれた恥ずかしさからなのか怒りなのか顔を赤くして
音楽室を飛び出して行った。

その後時々俺は彼女のいるクラスに行くようになった（友達と話に
きたふりで）。なんかストーリーカーまがいな行為だなとかすかに思っ

ていた。それに目が合うとすぐそっぱを向かれるやつぱり嫌われているのかなそう思った。最初はもう一度あの音が聞きたいと思っていたのだがいつしか彼女を見ていたら好きになってしまっていた。自分にそんなことがあるはずはないといままでは思っていたけどそれは覆された。

しかし彼女は美人だっただから彼氏がいると言う噂はたくさんあった。もしも付き合っなくなって俺なんかは彼女に群がる男「バカ」と同じなのだろうそう思った。

お昼休みには左下にある音楽室からバイオリンの音が聞こえた。俺はこのままでは彼女と釣り合わないそう思った俺は一生懸命になつて勉強を始めたそしてこの力を活かして

楽器をなにかしようと思った。ピアノにしようそう思ったとき俺は初めてその音の素晴らしさに気付いたピアノの音は音階によって程良い甘さがあつて一瞬で惹かれた

いままですべてきたお小遣いでキーボードを買った俺は毎日毎日弾き続けた

初めは彼女に近づくためだった。が今となっては弾く事がとても好きになっていた。

学校の音楽室でお昼休みにはいつも弾いていた。こつそり彼女が弾いているバイオリンの音に合わせて弾いたこともあった。俺にとつてはこれがとても幸せだった。

最近気づいたのだが俺と彼女の登下校の道は同じなのだ。彼女はいつも友達と一緒に帰っていた。俺は家に帰っても勉強してキーボードを弾く事に没頭していた。親からすれば

いままですべてこもりに近いことをやっていたので安心しているのか。なつてなことを思っていた。母親に夕飯で呼ばれたその時ニュースでこの近辺に殺人犯がいることが最初のニュースで流れた母は「物騒だね」といったその後にも県内ではひき逃げや銀行強盗なんかも起こっていた。銀行強盗の様子録音が流れたこんなに毎日事件が起こっていると安心して夜も寝れなくなるのでは?と思った。し

かし人間と言うのは自分の身に降りかからない危険についてはあまり不安に感じ無いのだろうすぐに眠りについてしまった。

翌日いつもより早く家を出たそして音楽室にいつってピアノを弾いた朝に弾くのは初めてだった。するといつもお昼休みに聞こえていたバイオリンの音が聞こえたいつも甘く落ち着く音は、今日は一層心に響くこの感じは全く雑音がないためなのかわからなかったけど素晴らしいという事だけが素直に自分の心が指し示している。

俺はピアノを弾くのを忘れて聞き入ったそしてその後はいつも通りに過ごしていた。

今日の帰りは俺は伊集院先生に頼まれた資料室の片づけをしていて遅くなってしまった。

歩いて帰っていると彼女がいた、彼女も帰るのが遅かったせいかもしれない一緒に帰っている友達はいなかったそこに警官の格好をした人が近づいて行った、なんでかわからないが

とっさに隠れてしまった。のちにこれは人間という名の動物の本能だったという事。

ここは特に人通りの少ない道この先に家がなければわざわざ通ったりしない。誰のか、わからない倉庫の横の影に隠れたそしてゆっくり耳を澄ます。

「君は。。高校の生徒だね。」そんな声が聞こえたかなり小さな声で言っていた。

俺はその声に聞き覚えがあったが思い出せなかった。

「ちよつと道を教えてほしいんだ初勤務だったから忘れちゃって」明らかに嘘をついていたこの酸っぱくて苦いこのトーンは全人類共通の嘘をついた時特有のあじだ！俺は心の中に核心が一つ出てきた。ついにはかおをだしてそいつに話しかける

「おい警官なんだよな」そういきなり声をかけると警官らしき人は「そうですね、今このお嬢さんに交番までの道を聞いていたんですよ。」丁寧に隠しているこれは力がなくても怪しいと思うのでは？そう思いながら警官をみる徐々に警官の右手がポケットへと入って

くる。「本当に困ってねえ、早く戻らないと首になるかもしれないんだ」背筋がゾクつとした

その声に圧倒されたのと不気味な冷たさを持つ味とあと・・・銀行強盗の音声に入っていた叫ぶ男の声とかぶった。俺が出てきて少し驚いていた彼女は「あの交番はその道を右に・・・」そう言っている間に俺は彼女の腕を引つ張り駆け出そうとした「な、なに？」

当たり前だ、戸惑っている「いいから早く来て！」ついに怒鳴ってしまったが、二人ともかなりあわてていたに違いない彼女が「な、何？」と言った時には警官はナイフを取り出していた。「何逃げようとしてんだよ！」そう警官、いや、すでに警官ではなくところ構わず殺気を振りまく狂気をまとう男と化していた。「ちっ！おまえはあの銀行強盗だろ！？」

「ああそつだよあそこの店員たつた300万しか渡さなかったただ俺は人生棒にふつてやったのに！」そいつの声はもう味と言う味ではない吐き気がするほどの不味さだった

「しるかよ！」俺は自分を前にして彼女を後ろに逃がす。「この糞餓鬼！あの女はお前の彼女か？」憎悪に満ちた声で叫ぶ。「いいや声もかけたことねえ」憎悪に満ちた声がかすかだがゆるんだ「じゃあお前はお人好しか。」「ちよつと間をおいて」「はっはっはっは俺はそーいう奴が大嫌いなんだよ。ああ！この偽善者め」あとのセリフをさつきよりも怒り狂って叫んだ「ああお人好しかもしれない。けど俺はあの子を大切に思ってるから体張ってるんだよ。」「その後男はさらに怒り狂ってさけんだ「じゃあお前を殺した後あいつも殺す」

俺は絶対やばいそう直感した、男はナイフを降ってきた俺は間合いを取ってそれをよける

やはり素人なのだろう前のめりになった。「ちょこまかと、さつさと切られてしまえ！！」

体勢を戻した時チャリンと金属音が聞こえたあのポケットにはまだ2本はナイフがあることを確信した。まずいナイフを投げに来る、

そう感じた案の定投げてきた

あわてているためかぜんぜん違うところに飛んで行ったしかしすぐ横の壁にぶつかって俺に向かってきた。そのナイフは俺の腕をかすめる。痛みが体を走った。切れたところを押さえる、「くっ！」その声を漏らす「いいぜえその声俺の好きな声だ！」もうすでに男は人間じゃない人の形をした怪物だ。俺はその恐怖に吞まれた、俺はその場から逃げたくなっても、でもここで逃げたらもしかしたあの子が先に殺されるかもしれない俺は全力で男に突っ込む意表を突かれたのか驚き一瞬動きが止まる

そのすきを狙って力を込めて突っ込むそして男が壁にぶつかるすこしめまいがしたように

めを閉じていた。俺はその一瞬を見逃さない落ちていたナイフを拾うわざと外して振り下ろす。「わ、わかったお前を殺すのはやめるだから見逃してくれ！」そうさけんだ

「そうかじゃあ行け・・・っとでもいうと思ったか千恵を怖がらせた罪をしつかり償ってもらう」もうさっきのような殺気は消えていて怯えていた

そしてすぐに本当の警官が来た俺は警官の格好をした男を押し倒していたから少し焦った

「あ、あのこれは・・・」と言っている間に倒れている男を連れて行った

「危ないじゃないか君」そう怒った口調で本物の警官に言われた

「あ、すみません」確かに逃げてよかったかもしれないそう思ったでも・・・「大体の事情はあの子から電話で聞いたよ」そう指さす方に美月 千恵がいた。

すぐに彼女の元に駆けつける「大丈夫だった？」そう聞くゆっくりとこっちに顔を向ける

すこし顔を赤くしていた「うん大丈夫だった、けどずっとその倉庫の横に隠れてて」

その倉庫の横っていうのはさっき俺が隠れていたところだった

彼女はさらに続けた「あのね、それあの男との会話を聞いたの」
そのセリフを聞いた時

顔全体に刺激が走りかおが熱くなった「えっ・・・とじゃあ、あれ
も」と聞くと彼女はうなずいた俺はこんどこそ逃げたくなっても
足は動かなかった

答えを聞くのが怖かったから。力のことはすでに忘れていた。ドク
ンドクンの心臓が脈打つのを俺は感じていた、ゆっくりと彼女の口
が開く「ありがとう助けてくれて、それと

・・・付き合って下さい」えっ・・・一瞬時が止まったかのように
思えた

俺が告白して彼女も告白した。意味が分からなくなった。そして「
俺と付き合ってくださいい」混乱したため噛んでしまった彼女も意
味不明の返答に戸惑ったようだったがすぐに

微笑んで「ありがとう」そう言ったその日は二人とも警察にいろい
ろと聞かれ帰るころにはもう夜だった。親には警察の方から説明が
あったらしいただいまも言わずに家の中に入る混乱がまだ解けてい
ない両親が何か聞いてきたがあいまいな返事をして自分の部屋に戻
る。無理やり眠りに就く疲れ切っていたのか心拍があまりおさまら
ないうちに

眠りについてしまった。

朝早くに起きる昨日の約束を果たすために昨日一緒に帰り道を歩いた
明日早めに音楽室に来て「そう言われた。混乱した中でもそれだけ
はしっかりと

覚えていた。学校着くといつもは3階に昇らないと聞こえないバイ
オリンの音が一階まで響いていた、そうこの音に最初は惹かれたの
だ心に響くこの音はきつとこれ以外味わう事が出来ない究極の味こ
れだけあれば何も食わなくても飲まなくても済むんじゃないかと思
うくらい美味だった。ゆっくりしかし足早に階段を上る

いつも一人の空間だった俺の世界にあの曲が変えてくれたあの空間
を壊してくれたんだ

この音が、あの子が・・・音が流れている3階の左下の音楽室に向かう

扉が開いていただからここまで響いていたのかそう思ったおれに気付いたのか弾くのを止める。「おはよう」そう微笑みながら言う。

俺も反射的に「おはようございます」

なぜか敬語で答える・・・たぶん顔は真っ赤だろうそう自分でも気づくくらい顔が熱かった「一緒に弾かない？」「えっ・・・」「音楽君のピアノ好きなんだよね。」にこつとしながら言う俺は気を落ち着かせて弾く俺も彼女も微笑みながら

それから毎日毎日美しく甘いそしてほんわり暖かな一つのメロディーが

朝の学校に響いていたそのメロディーは毎日聞いても

自分が弾いていても

俺の、俺の心に

響いている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6493p/>

心に響いて

2011年1月12日22時51分発行